

## 日本国際文化学会第23回全国大会開催報告

### 第23回全国大会 実行委員長 平島（奥村）みさ（東洋大学）

日本国際文化学会第23回全国大会は、2024年7月13日（土）、14日（日）の2日間にわたり、東洋大学白山キャンパスにおいて開催されました。

東洋大学の後援を受け、「地域における国際文化と大学」という総合テーマの下で実施された全国大会では、参加登録者はスタッフも含め学内外159名にのぼりました。共通論題はおそらく大会最多の7件35報告とコメント、自由論題も6部門で24報告、フォーラム、そして開催校シンポジウム・企画と、多岐にわたる充実した内容となり、いずれの部会でも猛暑に負けない、活発で熱い議論が交わされました。

共通論題と自由論題の興味深い内容については各論題要旨に譲りますが、大学院生交流会は今回も好評を得た点を特に記します。フォーラムでは、本学会設立20周年記念出版企画趣旨とスケジュールの説明があり、総会では、2023年度ICCO短期集中セミナーのベストプレゼン賞に輝いた学生たちが京都や奈良におけるフィールドワークの成果を報告しました。

開催校シンポジウム「地域における国際文化と大学①－移民、難民、多文化共生－」では、村上一基氏（東洋大学准教授）が北区の多文化共生地域社会を作る域学連携のプロジェクトと東洋大学の社会調査演習科目との関わり、斉藤尚文氏（元中京大学教授）が愛知県保見団地の事例と学生団体の発足、小川玲子氏（千葉大学大学院教授）が千葉大学の移民・難民への支援と教育について報告し、高橋典史氏（東洋大学教授）が司会とディスカッションを兼ねました。参加者からも事例や問題の共有があり、有意義な意見交換ができました。

開催校企画「地域における国際文化と大学②－内なる国際文化教育－ドナルド・キーン氏蔵書整理プロジェクトの成果と意義」では、石田仁志氏（東洋大学教授）が、北区名誉区民故キーン氏生誕100周年に蔵書6425冊を東洋大学の学生たちが整理した過程と、この事業の地域社会への貢献、異文化理解教育への効果を紹介しました。本企画にはドナルド・キーン記念財団と東洋大学図書館の全面協力を得、図書館にて「ドナルド・キーン蔵書特別展」が同時開催され、キーン氏の足跡を辿るパネル展示や貴重な蔵書の一部、三島由紀夫らの自筆献辞記載の稀少本も展示されました。情報交換会では「お江戸



大会初日 シンポジウムの様子



のおいしい夏」を掲げ、「三ノ谷中商店街」、伊達政宗・徳川光圀ゆかりの松柏軒による地元飯の深川飯を含む体に優しいメニュー、多摩のクラフト・ビールなどもお楽しみいただき、夜は幸運にも晴天に恵まれ、スカイツリーと東京タワーの両方を一望できる夜景をご堪能いただけました。

以上、無事に大会を終えることができたのは、ひとえに皆様の温かく力強いご支援とご協力のおかげでございます。実行委員一同、心より感謝申し上げます。

次回は高崎経済大学において第24回全国大会が開催されます。再び、多様なテーマで刺激に満ちた議論が交わされますことを楽しみにしております。

【日本国際文化学会第23回全国大会実行委員会】実行委員長：平島（奥村）みさ（東洋大・教授）、実行委員：市岡卓（流通経済大・教授）、坂口可奈（北海商科大・講師、菅野敦志（共立女子大・教授）、高橋典史（東洋大・教授、社会学研究科長）、南田明美（静岡文化芸術大・講師）、山田香織（東洋大・准教授）、50音順、敬称略。

## 第23回全国大会要旨

### 【共通論題1】〈あの世〉の国際文化学

吉岡剛彦（代表）、土屋明広、宮地歌織、木原誠

本分科会は、従来、国際文化学（間文化学）は、現世における文化（価値観）相互の軋轢や衝突とそれの調整・仲裁に主に視線を向けてきたが、同時に「死者・死霊／異界・怪異」と我々との関係性についても眼を向けるべきではないか。〈あの世〉との交わり（の深さ／無さ）が、現世に暮らす我々の文化のうちに、どのように影をさし、いかに響きわたっているか、その「影-響」を探ることも重要である、との問題関心にもとづく共同研究である。

先ず第一報告「恐山の現在地」（吉岡剛彦・佐賀大学）は、上述の提題をおこなったうえで、われわれが、「あの世」から自己の生を見つめかえし、そこに住まう「死霊」へ語りかけ、「死霊」からの語りを聴こうとする（「亡者」を媒介として自己の生を省察・再編する）機会としての「恐山／イタコ」が、戦後日本においていかなる盛衰をたどったのかを確認することで、戦後社会の「死者」の位置づけ（死者の忘却）に一考を加えた。

続いて第二報告「〈あの世〉と法」（土屋明広・金沢大学）では、一見、死者・彼岸などとは縁遠そうな法律が案外と密接な連関を有している実状が、死者の名誉毀損や生前意思（遺言）、祖霊祭祀や遺体埋葬に関わる法規などを挙げて解説された。死体遺棄罪をめぐって、ベトナム人技能実習生が自宅で双児を死産後、その遺体を吊いの言葉を記した紙で包んで箱に入れ、部屋の隅に置いていた行為について、地裁・高裁の有罪判決を破棄し、2023年に最高裁が逆転無罪

とした事件等が紹介された。遺体の扱いをめぐる文化的差異が問題化したケースであった。

次いで第三報告「西ケニア・グシイにおける伝統的信仰」（宮地歌織・高知大学）では、報告者が年来FGM（女性器切除）のフィールドワーク調査を継続する西ケニアに残る妖術信仰等が紹介された。同地では、長患いなどの場合—西洋医学も併用しつつ—時に月収相当の高額を支払って「呪医」による診断を受ける風習がある。また、若い世代も含めて「夜は妖術者が徘徊して—素っ裸で走り回って（witchrunner）—いる」と信じられ、夜間の外出は禁忌とされる。近時妖術者の嫌疑をかけられた人物の殺人事件などが起きており、信仰の「現代化」が課題である。

最後に第四報告「あの世は存在するのかもしれないのか、それが問題である」（木原誠・佐賀大学）は、シェイクスピア『ハムレット』の有名な台詞“To be, or not to be, that is the question.”は、ハムレット王子が「父の幽霊／その幽霊が棲む煉獄は、存在するのかもしれないのか」と問いかけたものであり、強固なプロテスタント国家の形成を進めていた上演当時（エリザベス朝）のイギリスにあって、カトリック信仰の徴表である「煉獄の存在」を示唆する演劇制作は命懸けだったとする解釈を示す。結論部では、幽霊（死者の幻影）たる「イメージ」が現代社会でも、ほうぼうにあまねく「存在」し、われわれに影響力を行使（「憑依」）していることが指摘された。

### 【共通論題2】多文化共生と国民統合

川崎賢一（代表）、坂口可奈、南田明美、市岡卓、平島（奥村）みさ（討論者）

共通論題②では、多文化共生と国民統合をテーマに、シンガポールの最新の状況と分析を、

1. トップダウンからの分析
2. ボトムアップからの分析
3. マイノリティからの分析

そして、具体的には、①政府による「上からの」文化政策としてのデザイン政策（坂口報告）、②「草の根」レベルの活動として「人種調和の日」の国民統合行事（南田報告）、③「包摂」から排除されている少数民族の性的マイノリティの困難さ（市岡報告）、の3つのベクトルからアプローチを試みた。シンガポール研究は、田村慶子（北九州大学）を中心に、ここ15年ほどで急速にその分析が蓄積してきた。今回はその流れを受けたものである。

最初の報告は、坂口可奈氏（北海商科大学）から、「シンガポールのデザイン政策からみる「国家の」文化」というタイトルで、デザイン推進政策をシンガポール政府による「国家の」文化の醸成の一部として位置づけ、国家建設の観点からデザイン推進政策の役割を分析した。2000年代初頭以降、シンガポール政府はクリエイティブ・インダストリーの中心分野としてデザインを位置づけてきた。デザインの推進には経済的利益の追求が背景にあるものの、同時に国内政治的・社会的な側面があることも否定できない。デザインがシンガポールの国家建設にいかに利用されてきたか、を明らかにしようとした。

第二の報告は、南田明美氏（静岡文化芸術大学）から、「シンガポールの文化的統合の変遷：The Straits Timesにおける「人種調和の日」に関する言説から」というタイトルで、どのようにシンガポールがグローバルな視点を持って「草の根」レベルでの国民統合を行ってきたのかを、「人種調和の日」を事例にしながらかその変遷を検証した。「人種調和の日」は、1964年7月21日の華人・マレー人の対立による暴動を教訓に、1997年に開始した。その目的は、「人種調和」を寿ぎながら、各民族文化を知り、「国民としての自覚」（The Straits Times：1997年7月21日）を醸成することであり、そのために学校・コミュニティ・クラブで文化的イベントが実施されている。国民統合の国家的重要行事のひとつを明らかにした。

最後の報告は、市岡卓氏（流通経済大学）から、「シンガポールの性的少数者のムスリムの包摂に向けて—「文化戦争」の中で—」というタイトルで、シンガポールの性的少数者のムスリムが直面する困難について実証的研究を行った。具体的には、性的少数者のムスリムの状況について当事者に対するインタビューを行い、ムスリム以外の性的少数者とも比較しながら、彼らが直面する困難やその原因を把握・分析しようとした。中でも、特に厳しい状況にあるトランスジェンダーのムスリムの状況に注目した。その上で、ムスリム及び非ムスリムの当事者コミュニティによる支援の実態も踏まえ、

シンガポール社会全体としての性的少数者のムスリムの包摂のあり方について考察を試みた。

3名の報告の後、英語圏を中心に国際社会学的研究を続けてこられた平島（奥村）みさ氏（東洋大学）がコメントを寄せた。その趣旨は多岐にわたるが、特に、他の社会との比較をどう取り入れるかという重要な提案をなされた。シンガポールは、①都市、そして、②国家という二つの性質を併せ持ち、特に、グローバル都市としての側面からも分析をする必要があるという貴重な内容だった。

それに対して、3名から、それぞれの確な反応と今後の課題や方向性についての言及があり、最後に、時間が極めて限られていたが、フロアから、①デザイン産業に関するコメント、②インドネシアにおける近似ケースの提示、③シンガポール研究におけるさらなる研究の方向性、の3つの質問とコメントが寄せられた。限られた時間の中で、密度の濃い報告、そしてコメント、さらに、フロアからの的確な指摘と続き、充実した共通課題のセッションとなった。

### 【共通論題3】 移民と国際文化

#### 加藤恵美（代表）、上地聡子、土谷岳史、稲木徹、斎川貴嗣（討論者）

本共通論題では、「国際文化学」の諸問題とアプローチを体系的に示すことを目的に遂行されてきた学会20周年事業（出版プロジェクト）の「移民分科会」のコアメンバーが報告を行い、その後「国家と国際文化交流分科会」のリーダーからコメントを得て、フロア全体で討論を行なった。

まず加藤恵美会員（帝京大学）が「『文化と移民』総論・試論：在日コリアンに注目して」と題して、平野健一郎『国際文化論』（東京大学出版会、2000年）を参照しつつ、在日コリアンをめぐる諸事象を事例として<international>関係と<international>関係ならびに<際ノあいだ>という出版プロジェクトのキー概念を検討した。第2報告では、上地聡子会員（明海大学）が「重層的立場を利用した生活資源の確保：GHQ占領下日本の沖縄人」と題して、「国境」が引き直されたことにより法的に曖昧な立場に置かれた人々が生活資源を確保するために実践した多様な「名乗り」を、「生きるための工夫」として分析した。第3報告は土谷岳史会員（高崎経済大学）による「ロマのアイデンティティとEU政治」であり、「社会」・「国家」・「EU」という複数のレベルで国際的な文化の接触・変容が起こることで、ロマ・アイデンティティが構築・強化されうることを論じた。第4報

告では稲木徹会員（韶関学院）が「文化的権利と『交流』」と題し、社会におけるインターカルチュラリズム（「交流」）が移民の文化的権利（マルチカルチュラリズム）を制限した事例を提示しつつ、移民個人の文化的アイデンティティ（人間の尊厳）を守る「交流」を模索することの重要性を主張した。

以上4つの報告に対して、討論者の斎川貴嗣会員（高崎経済大学）が、平野健一郎会員が人の移動の国際文化学へのインプリケーションを導き出しているカントの『永遠平和のために』を引きつつ、「訪問権」のみが世界市民法に書き入れられることの消極性を論じ、さらに平野会員が『国際文化論』の中で論じた「共棲（symbiosis）」と「共生（living together）」の区別に関する問題提起などを行った。その後、フロアの参加者との間でも活発な討議がなされた。ここでは、インターカルチュラリズムとマルチカルチュラリズムの相違点についての理解、そして分断国家におけるナショナリティあるいは過去の不正義の責任とナショナリティの関係についての理解が深められた。すべての参加者のおかげで、このように大変実りある共通論題となった。この場を借りて、皆さまに心からの感謝を申し上げたい。

### 【共通論題4】 思想家としての鶴見和子——中国、環境、女性

#### 松居竜五（代表）、朱琳、森田系太郎、加古陽治、馬場孝（討論者）、田村義也（討論者）

鶴見和子（1918-2006）は青年期のアメリカ留学に始まり、生涯にわたって多方面で活躍した人物である。その学問は社会学に基づきつつ、民俗学やライフヒストリーの手法を取り込むことで、学際的な展開を目指した。また、国際関係、戦争、環境、ジェンダーなどの20世紀の諸問題に柔軟に取り組もうとした姿勢も注目される。今回の共通論題では、思想家としての鶴見和子を多角的に分析した。そのため、朱琳（仙台高等専門学校助教）、森田系太郎（立教大学・兼任講師／研究員）、加古陽治（東京新聞記者）が下記のような発表をおこなった。

森田の報告のタイトルは「鶴見和子と(エコ)フェミニズム」で、現在の学問的地平からすると(エコ)フェミニストと措定できる鶴見和子が、環境問題等の他の 이슈に比べてなぜ女性(問題)についてはそれほど積極的に発言しなかったのか、という問いに挑んだ。理由の1つは、当時優勢だった「女も男並みになる」というリベラル・(エコ)フェミニズムを鶴見は否定しており、発言することでそのような思想に取り込まれてしまうことを避けたかったこと。もう1つの理由は、当時、研究者は“中立”の立場であるべきとされていた学問実践において自らの位置性positionality、つまり「(エコ)

フェミニストである」ことを標榜することに躊躇いがあったのでは、というもので、これは最近発見された新資料に基づく、どちらかというと思弁的speculativeな考察であった。朱は、1950年代に出版された『パール・バック』を取り上げ、鶴見和子の内発性の形成と他者認識との関係を解明した。内発的発展論が形作られる前の時期であるが、思想史の視点から人物にアプローチする場合、鶴見和子自身の内発性の形成を探求することは避けられない作業である。本発表は、『パール・バック』から読み取れる鶴見の葛藤や、アメリカの知識人との共鳴などに注目したと同時に、アメリカ作家と中国作家の描いた異なる中国像が鶴見和子にとってどのような意義を持っているかを考慮しながら、異質的なものに注目し、他者を描くという行為は鶴見和子の内発性への目覚めを促したことを論じた。

最後に加古は「カレツヂ便り」の発見について報告した。それによると、鶴見和子が米国留学時に友人に宛てて出した手紙を紹介した雑誌記事「カレツヂ便り」が見つかった。佐佐木信綱主宰の短歌誌『心の花』の若手同人らが発刊し、鶴見も会員だった姉妹誌『鶯』1941年3、5月号に、1940年3月～41年2月までの計7通が掲載されていた。相手は津田英

学塾の後輩で、信綱門下の歌人・福田（後に中井）岳子。「女と哲学」に悩む姿や、自殺念慮を抱いたこと、それを教授に救われたことなど、「親展」ならではの生の声がつづられていた。一方、私家版歌集「里の春」の短歌からも、鶴見の留学時や帰国後の「心の声」が聞こえる。歌をたどると、鶴見は滞米中に教授とみられる人物と恋をし、開戦により仲

を引き裂かれたことが推定できる。

以上の発表を元に、コーディネーターの松居竜五（龍谷大学教授）の司会により、馬場孝（静岡文化芸術大学名誉教授）、田村義也（南方熊楠顕彰会常任理事）がコメントし、討論がおこなわれた。全体として、鶴見の持つ多面性が浮き彫りにされたシンポジウムであった。

## 【共通論題5】 エラスムス像と貨狄様 「未知との出会い」が生み出したグローバル文化交流 芝崎厚士（代表）、森良和、道山秀樹、高光佳絵（討論者）、大和裕美子（討論者）

本共通論題は、重要文化財「エラスムス立像」をめぐる400年以上にわたる歴史とその謎を「未知との出会い」がもたらしたグローバルな文化交流現象としてとらえ、学際的に考察することを目的としていた。

共通論題の構成は、大山貴総会員（九州工業大学）の司会の下、代表者の芝崎（本稿執筆者）、森良和氏（元玉川大学教授）、道山秀樹氏（エラスムス像研究会代表）の三者による報告、高光佳絵会員（千葉大学）、大和裕美子会員（九州共立大学）によるコメントである。

芝崎による報告「エラスムス→貨狄様/貨狄ババア/小豆とぎババア→エラスムス 1600-2024」は、本共通論題の全体の概要、及び前提となる知識の紹介を含めたものであった。リーフデ号と共に日本に「漂着」した同立像は、17世紀初頭の段階で龍江院（栃木県佐野市）に到来し、観音堂に置かれ、エラスムス像であることが知られないまま、「貨狄様」「貨狄婆」「小豆とぎ婆」といった呼称で知られていた。龍江院に辿り着くまでの経緯は不明であり、いくつかの仮説が提起されているが、現時点では事実の特定に至っていない。

その後20世紀初頭に地元の郷土史家丸山瓦全によって「再発見」され、新村出など当時の研究者達の考証の末エラスムス像であることがわかり、その由来についてさまざまな検討がなされた。オランダ側からの返還要求もなされたが、1930年に国宝（当時）に指定され、一時オランダに「里帰り」したものの、国立博物館が現在に至るまで所蔵している。

何の像かわからないまま長期間親しまれていたこと、また

モノとしての立像の移動の経緯と過程が今のところ不明であること、にもかかわらず少なからぬ人々の関心を引き、その謎を解明しようという動きが続いている。オランダから日本へ、地球を半周以上し、日本でも九州から佐野へと移動したこのエラスムス像は、まさにモノの移動によって人々に文化の接触をもたらし、その「未知との出会い」が人々を動かしていった現象であり、国際文化学の考察の格好の対象となるのではないかというのが芝崎報告の骨子である。

森報告「リーフデ号がもたらしたエラスムス像」は、三浦按針研究の第一人者でもある森氏による、リーフデ号→龍江院という像の移動に関する、可能な限りの実証的な考察である。近年発見されたいくつかの手掛かりや、国立博物館による科学的な分析などを踏まえつつ、龍江院への移動に、従来提示されていたウィリアム・アダムズではなく、ヤン・ヨーステンが何らかの役割を果たしていた可能性を提起した報告であった。

道山報告「エラスムス像研究の経緯と活動の紹介」は、近年のエラスムス像研究のリバイバルの最大の貢献者である同士が、エラスムス像に関心を持った経緯、地元での啓発活動、2022年の資料館開設に結実した各種の資料作りや、平戸、横須賀、伊東、臼杵などゆかりの各地との交流、さらに2025年に予定されている、初の佐野市への里帰り展示企画などを紹介するものであった。

二人のコメントからは、それぞれの報告に対して要を得た質問・感想がなされ、フロアからも活発な意見が示された。

## 【共通論題6】 「文化外交官」柳澤健の戦前・戦中・戦後： 世界をつないだカタリストの国際文化学的考察

湯浅拓也（代表）、稲賀繁美、酒井健太郎、山本尚史（討論者）、渡辺かよ子（討論者）

本共通論題では、文化外交官・柳澤健（1889-1953）による国際文化交流について、共同研究のメンバーによる報告が行われた。

柳澤健は会津に生まれ、学生時代から詩人・文筆で知られ、一高、東京帝国大学で学び、逓信省、大阪朝日新聞社を経て外務省に勤務した人物であり、国際文化振興会の創設、日本ペンクラブの設立に貢献したことで知られている。その後、外務省を辞し、戦時中には日泰文化会館館長となりバンコクで終戦を迎えた。戦前・戦中・戦後にかけて20冊以上の著作を発表すると同時に、田中耕太郎、近衛文麿、賀屋興宣、島崎藤村、三木露風、山田耕作、西条八十、藤田嗣治、尾上菊五郎（6代目）、山宮允など、政界・財界・学界・芸術分野など人々との豊かな交流をもった人物であった。

第一報告は、稲賀繁美による「文化事業の舞台裏：修善寺物語パリ上演・日本ペン倶楽部創設・日泰文化事業と柳澤健」であった。稲賀は国際文化事業に対して柳澤がどのような問題意識を有していたかという点について、日中戦争前後の時代背景や周辺の人物とのやりとりからその人物像に迫った。その上で、修善寺物語のパリ上演などフランス駐在時の柳澤の実践や国際的な人的関係性が国際文化振興会実業活動の下地となっていたことを明らかにした。

第二報告は、湯浅拓也による「2つの在外文化会館の比較研究：柳澤健の日泰文化会館と前田多門の紐育日本文化会館」であった。湯浅は2つの在外文化会館を危機の中で設置された文化会館として同じ文脈で捉えるのではなくそれぞれを比較しながら検討することの重要性を指摘した上で、2つ

の在外文化会館と2人の館長の比較を行い、必ずしも文化的関係性が政治的関係性と一致しないことを明らかにした。

第三報告は、酒井健太郎による「柳澤健の音楽観：彼は音楽をいかに聴いたか」であった。酒井は柳澤が音楽そのものではなく、その周辺のことばかりを語っているように見えることに注目して、柳澤はアドルノが言う「教養消費者」であったのではないかという問題提起を行い、年代に沿って、柳澤の音楽に関する文章を対象に分析を行った。

その結果、柳澤が音楽自体の純粋性と音楽聴取の純粋性を

区別していたとも考えられ、「教養消費者」である一方で「構造的聴取」（エキスパート）に接近していた可能性があることを明らかにした。報告に対して、討論者の山本尚史と渡辺かよ子から個別の報告内容に対するコメントとともに、カタリストとしての柳澤をどのように捉えるべきかなどの共通論題全体に関するコメントがあり、報告者を交えて議論が行われた。さまざまな専門性を持つ研究者の間で活発に議論を行うことができ、国際文化学が持つ学際性を改めて実感することができた共通論題となった。

## 【共通論題7】 文化としての「過去の伝承」－その条件、課題、そして意義 藤田賀久（代表）、小川輝光、松井真之介、飯森明子、高橋梓（討論者）

歴史家は厳密な史料批判を基に歴史解釈を行う。しかし「過去の伝承」の担い手は学術的訓練を積んだ歴史家に限られない。とりわけ地域コミュニティの経験などは、当該地域の教育者や自治体、市民団体などが伝承の役割を担ってきた。その方法としては、口伝、記念碑の設置や保存、フィールドワーク、慰霊祭など多岐にわたる。これらは「記憶の場」を構築して後世に引き継ぐ主要な回路であり続けてきた。

では、こうした「過去の伝承」が可能となる条件は何なのか。また、そこにはいかなる問題が生じるのか。本セッションでは、各発表者がそれぞれ注目してきた事例を通じてこの問いに迫った。

藤田（多摩大学）「十津川村－継承される悲劇と忘れられる悲劇」では、奈良県十津川村が経験した2つの悲劇（1889年大洪水と北海道新十津川町への移住、および1940年以降の満蒙開拓団）を取り上げ、それぞれの伝承の特徴を指摘した。そして、過去が意図的に「選別」され、あるいは（意図的に）忘却される理由を考察した。小川（神奈川学園中高）「忘却に抗う文化－神奈川の朝鮮人虐殺継承の現場から」は、「関東大震災百年」の焦点の一つであった朝鮮人をめぐる流言・虐殺の問題を取り上げた。小川は、神奈川県内の各自治体や市民団体などによる虐殺に対する向き合い方について触れた後、自らが実践してきた高校生対象のフィールドワークを紹介し、忘却に抗う

て記憶を共有・形象する方法と意義に言及した。松井（宮崎大学）「忘れ去られかけた大虐殺－アルメニア人大虐殺、国際的認知をめぐる100年」では、1915年にオスマン帝国で発生したアルメニア人大虐殺を取り上げた。虐殺が伝承されるためには、虐殺が発生したことを「認知」する必要があるが、この出発点においてすらトルコ共和国や欧州諸国は認識や解釈を異にしてきたとして、いわば「過去の伝承」を巡る国際的なポリティックスを議論の俎上に載せた。飯森（桜美林大学）「渋沢栄一の語られ方－その現代的課題」では、近年TVドラマや紙幣肖像に登場するなど多方面から注目されている渋沢栄一に関して、実証研究から乖離した「イメージ」が地方自治体やメディア、そして企業等によって造成され、発信されていることを指摘し、その功罪を問い質した。

コメンテーターの高橋梓（近畿大学）は、発表者が提示した4つの「伝承」の論点を整理し、それぞれのテーマに類似する文学作品に引き寄せた。そのうえで、4人が提示した社会科学的な問いに対して、文学・人文学の観点から光を当てることで見えてくる新たな地平を提示した。会場からは、「過去の伝承」への向き合い方やその意義などを巡る質問が続いた。非常に活発な議論は、本セッションが提示した問いを共有する研究者が多いことを示唆していた。



## 【自由論題A】 関係性とアイデンティティ 飯笹佐代子（司会）、李悦、菅野敦志、田中佑実

第一報告は、李悦会員（東北大学）による「『ポルトガルらしさ』とステレオタイプへの挑戦—1930年代ポルトガルにおける2つの公式文化事業をめぐる—」であった。植民地博覧会と「最もポルトガルらしい村」コンテストに注目し、内外の危機的状況のなかで成立したサラザール独裁政権が、国家の内部的統合と外部イメージの再構築にどう取り組んだかについて考察された。これら2つの事業は「帝国」と「ネイション」というアイデンティティの2つの位相に対応し、相補的關係にあること、またサラザールとその側近がさまざまな文化装置を駆使して段階的・戦略的に国民統合に取り組んだことが、資料的根拠をもって説得的に示された。質疑応答では、国民統合における文化装置としてミュージアム等の役割や、ポルトガル第一共和制との連続性と断絶性などについて意見が交わされた。

次に、菅野敦志会員（共立女子大学）より「中国語教育と国家シンボル—国民党下台湾における対外文化政策—」について報告がなされた。中国語教育と孔子イメージによる国家シンボルの構築という2点に着目しつつ、中国政府による対外文化政策のプロトタイプとしての観点から、国民党期の対外文化政策の形成と発展が歴史的に検討された。結論として、孔子学院・孔子像外交の原型が台湾に見られるだけでなく、台北語文学院・何景賢という人物が果たした役割が示されたことで、従来指摘されることのなかった兩岸関係および“中国の”対外文化政策の形成過程に対する新たな理解が得られた。

質疑応答を通じて、中国側の政策転換は1989年（天安門事件）以降であること、台湾の90年代以後の対外文化政策については、台湾の多様性に加え、人権の強調（大陸との差別化）がみられることなどが明らかにされた。

最後の報告は、田中佑実会員（北海道大学）から「ものづくりにみる樹木と人—フィンランドの手工芸『ククサ』を題材に」をテーマに行われた。フィンランドの人々及び欧州で唯一の先住民であるサーミの人々の間でつくられてきた白樺のカップ「ククサ」を巡るグローバルかつローカルな課題を整理し、モノの延長線上にある樹木と人のネットワークを示すことが目指された。グローバルな市場におけるモノの「真正性」と材料としての白樺のこぶの入手困難さがフィールド調査をもとに指摘され、手工芸「ククサ」から多岐にわたるテーマとの接点が提示された。質疑応答では、「ククサ」がこぶを用いる理由や、西洋美術史におけるクラフトとは異なる「duodji(トゥオッジ)」という概念、本物のサーミの工芸とデザインを保証するSámi duodjiマークなどについて議論が及んだ。

研究対象地域もテーマも三者三様であったが、いずれも「関係性とアイデンティティ」を考察する上で手応えのある貴重な報告であり、今後の展開が期待できる内容であった。多くの参加者にも恵まれ、質疑応答では関連で実りある議論が交わされた。

## 【自由論題B】 韓国朝鮮をめぐる歴史と表象 趙貴花（司会）、高光佳絵、劉國強、齋藤絢、石俊彦

本セッションでは、朝鮮半島の近現代の歴史とその中で女性運動家、芸術家、文学者たちの活動、特に女性たちの残した書簡や作品における文化的表象について、そして最近の韓国の文化発信力と日本における韓流の受容について発表された。

第1報告は、高光佳絵会員（千葉大学）による「戦間期のINGOにおける朝鮮グループの活動：金活蘭書簡を中心に」であった。この報告は、20世紀前半の女性運動家であり、IPR朝鮮グループの中心人物の1人であった金活蘭（Helen Kim）に注目し、彼女とIPR国際リサーチ委員会との往復書簡の分析を通じて、朝鮮グループがIPRにおいて合法的な形で朝鮮独立運動を展開していたことを明らかにするものである。高光会員は、Helen Kimが韓国で親日反民族行為者リストに名前が載せられ、対日協力者として糾弾されているが、戦間期に非政府組織であるIPRの立場を最大限に生かし、日本の支配に精一杯抵抗していたことが書簡から推察できると述べた。

第2報告は、劉國強会員（明治大学）による「美学への探究：1960年代における朝鮮半島の絵画作品」であった。この報告では、朝鮮半島が日本の植民地支配から解放され、朝鮮戦争（1950年に勃発し、1953年に休戦協定が成立）を経て大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に分断された後、朝鮮族民主主義人民共和国がどのような美術活動を行い、どのような独自の美術の道を探っていったかを検討した。劉会員は、1950年代に東ドイツおよび東ヨーロッパ諸国との活発な交

流の中で美術家たちが受けた影響、そして1960年代に『朝鮮美術』に掲載された女性作家の美術作品の美学的表現について詳しく説明した。

第3報告は、齋藤絢会員（名古屋外国語大学）による「茨木のり子の隣国観の生成：朝鮮半島と日本の文化関係を背景とした茨木の詩にある表象性を巡って」であった。齋藤会員は、朝鮮半島と日本の歴史的な関係の歪みに向き合った詩人の茨木のり子に注目し、彼女の隣国観の形成には彼女自身の視点から見た日本と韓国、彼女に影響を与えた詩人たち、そして『韓国現代詩選』（1990）に収録された詩の中の人々の日常の声などが深く関わっていると述べた。また、茨木が朝鮮半島の植民地化によってその民族の根幹をなす言葉が奪われたことに着目し、自ら韓国に留学し、韓国語を学ぶことでその言語と言葉の狭間にある歪みやハンゲルへの美意識を表現する彼女の前向きな姿勢は、今後の日韓関係を考える上で非常に重要な視点になると述べた。

第4報告は、石俊彦会員（東北大学）による「韓国ドラマから韓流ドラマへ：日本におけるテレビドラマ領域の韓流受容のアイデンティティ変遷」であった。石会員は、「韓国ドラマ」から「韓流ドラマ」への言葉の変化には人々の認識の変化が現れており、Kドラマは現在グローバルなコンテンツとして認識されていると述べた。また、日本で受容された韓流ドラマは、日本の視聴者の好みや社会的雰囲気の影響され、現地化した文化の一種であると指摘した。

## 【自由論題C】 文化／言語の解釈と変容 目黒志帆美（司会）、高橋梓、増淵佑亮、郭桐琳、若林一平

本セッションの第一報告は、高橋梓会員（近畿大学）の「個人の精神における異文化の統合—堀辰雄の折口信夫、マルセル・ブルースト受容に反映する二元論の超克—」であった。本報告は語り手の精神における生と死の結合から、個人の精神における統合のメカニズムを解明しようとする試みである。報告において、堀辰夫は折口信夫とマルセル・ブルーストの作品を通じて万葉とケルトのアニミズムと共通する発想を展開していることが示された。以上の発想に基づく文化の統合は、平野健一郎が提示した文化の統合の四区分とは異なるものであり、このありかたは「アニミズム的統合」として位置付けられた。

第二報告は、増淵佑亮会員（常磐大学）の「『肌色』の意味と国際文化学」であった。本報告は、Aことばの研究・B社会や文化に関する研究・Cことばと社会の関係に関する研究の3つを融合させつつ、国際文化学の知見をBとCに生かすことで、国際文化学における言語研究の可能性を追求したものである。報告では、どんな肌の色も示しうる「肌色」に対して、色彩語の「肌色」は色への名づけであり、「水色」などと同様に、肌が持ちうる色の一部から名づけが行われているという、色への名づけの傾向に関連付けた「肌色」の意味の説明がなされた。そして、「肌色」が問題となるのはそこに社会や文化の問題が関与するということが示された。

第三報告は、郭桐琳会員（龍谷大学・院）の「仏教語彙の日本古典文学データ資料による意味変化—二字漢語を中心に—」であった。本報告は、仏教に由来し、表記も読みも同じ

で意味が異なる二字漢語「世界」「内証」「精進」「観念」「方便」「結縁」「因縁」「所詮」の8語について、JKLibにおけるデータ資料『新編日本古典文学全集』による各語の意味的变化について通時的かつ計量的に考察を行った研究成果である。時代の推移に伴い、「方便」と「結縁」を除く他の語については仏教的意味から離れて一般的な意味への変化が観察され、江戸時代には一般的な意味が主導的であったことが指摘された。また、これらの対象語は江戸時代を通じて意味用法が一貫していながら、このうちの一部の語が江戸時代の資料で主流化した点が示された。

第四報告は、若林一平会員（文教大学・名誉教授）の「ペルシャ語からダリー語へ：アフガニスタンの言語と文化・試論」であった。本報告ではまず、1892年に英植民地・インド帝国の外相、デュランドにより引かれたデュランド・ラインが後にパキスタンとの国境となり、民族紛争の震源地となった経緯が示された。そのうえで、『実用ダリー語』テキストにおいて、インド・アフガニスタン・中央アジア・中国を通して日本に伝来した仏教文化に着眼した点が紹介された。さらに、ヘレニズムの影響によりガンダーラで誕生した佛像・仏教文化はアフガニスタンのパーミヤンの地で花開き「弥勒の旅」を続けた道程が示された。最後に、ダリー語の歌謡曲を通じて、戦乱のなかを生きる故郷への愛慕と難民の苦悩について説明がなされた。

## 【自由論題D】 領土／紛争／平和と文化 井上浩子（司会）、吉川純恵、大形利之、永田理乃

第一報告では、吉川純恵会員（専修大学）が「中国の南シナ海政策を推し進める地方政府」と題して、中国最南端の地方政府、海南省の南シナ海政策についての報告を行った。報告では、1988年に広東省の一地域から省に昇格した海南省が、独自に「海洋強省」戦略を打ち出して、海洋部における権益の確保・拡大政策を推し進めてきたことが指摘され、その具体的な内容の検討が行われた。海洋部での石油開発や西沙諸島での観光業の推進、永興島を中心とする三沙市の設置、海上民兵の編成など、海南省が行ってきた政策の検討を通じて、海南省独自の海洋政策が「海洋強国」を掲げる中国政府の政策を補完する関係にあることが明らかにされた。

第二報告では、大形利之会員（東海大学）が「インドネシアのテロ組織の回復力—JIの戦術転換についての考察—」と題して、1993年に設立されたイスラム組織・ジェマア・イスラミア（JI）の変容についての報告を行った。大形会員によれば、2000年代前半に活発なテロ活動を行ったJIは、2000年代後半以降は武装闘争を放棄し、宣教・教育などの活動を通じた社会への浸透を模索してきた。報告では、近年JIが政党活動を通じて政治に参加したり、国軍や警察、国営企業などに接近していることが指摘され、JIの「浸透戦術」の深化とも言える状況があることが明らかにされた。

第三報告では、永田理乃会員（九州大学大学院）が、「平和構築における文化の位置づけの検討—紛争後を生きる人々を

構成するものとしての文化—」というタイトルで報告を行った。報告ではまず、紛争後平和構築に関する議論の中で「文化」が私的な関心事と見なされて等閑視されてきたという問題関心が提示され、平和構築を考えるにあたって文化的属性をより積極的に扱うことの検討が行われた。具体的には、C.ギリガン、M.イグナチエフ、W.キムリッカ等の議論を援用しつつ、平和構築理論に内在する帰結主義の問題点、関係性という視点の重要性、アクターの文化的属性の重要性と公私二言論の問題点などが指摘された。

各報告の後には質疑応答の時間が設けられた。吉川会員に対しては、海南省の活発な活動に対する中国外交部の受け止めなどに関する質問が寄せられた。大形会員に対しては、JI解散後の展望、プラボウォ新大統領就任の影響などを訪ねる質問が寄せられた。また永田会員に対しては、援用された論者の議論と「文化」問題との関係に関する質問、文化と平和構築に関する既存研究への言及があった。いずれも示唆に富む質問で、有意義な質疑応答の時間となり、自由論題は盛況のうちに幕を閉じた。

なお、本セッションでは上記三報告に加え小野藍会員（九州大学大学院）が「領土権の正当化理論における文化の再定位—マーガレット・ムーアの領土論の批判的検討を通して—」と題する報告を行う予定だったが、諸事情によりキャンセルされた。

## 【自由論題E】 メディア・ジェンダー・フェミニズム 吉岡剛彦（司会）、深松亮太、相原征代、佐坂夏季

本分科会は、風刺画や文学作品、マンガ雑誌といったメディアを分析対象としつつ、それが有する社会的意味に対するジェンダー批判的／フェミニズム的な考察を加える3つの報告により構成される。

第一報告は、深松亮太会員（常磐大学）による「『女性参政権』をめぐる言説形成とその展開—The Review of Reviewsとアメリカ諸紙の風刺画分析を通じた検討—」であった。米国で女性参政権が認められたのは1920年だが、それに向けて20世紀転換期に女性運動が展開された。当時の同国の新聞に掲載された風刺画において、この女性参政権要求運動がどのように描かれ、いかなる言説が交わされたかを主題に論じられた。そこでは、女性の権利向上に反発・嫌悪・不安を覚える保守派／男性側から、例えば「運動しているのは、子どもよりパグ犬を好み、情緒が破綻した独身女性」というように「醜い女性が、女性本来の領域（家庭）を放棄しようとしている」といったイメージなどが喧伝された。質疑応答ではフロアから、米国の地域性や党派性を加味した更なる研究発展を期待する意見などが述べられた。

第二報告は、相原征代会員（北陸大学）による「『男性的なるものの敗北』のフェミニズム的評価—島崎藤村『若菜集』と土井晩翠『天地有情』の『藤晚時代』にみる文学と社会思想の交錯—」であった。いずれも明治後期に発表された島崎藤村『若菜集』と土井晩翠『天地有情』について「女性的な藤村、男性的な晩翠」という対照的な評価がなされたことに着目する。前者が、ひらがなを用いた朦朧体で、若人の青春・恋愛やその悲哀・煩悶を描いたのに対して、後者が、

漢詩の伝統を守りつつ、豪壮雄勁さや「国民の精髓」を謳ったことに起因するが、両作品の比較評価では「女性的な藤村」の勝利とされることが多い。相原報告によれば、文壇の批評は、単に「男性的なものの不在・欠如」を「女性的」と名づける消去法的な見方に留まったが、本来は藤村文学に内在する「循環と再生産としての女性性、こそが積極評価されるべきだったと結論づける。フロアからは『源氏物語』に代表される平安期の仮名文学、昭和戦時期のナショナリズムに基づく中国文学排除などとの関連が尋ねられた。

第三報告は、佐坂夏季会員（龍谷大学）による「『ちゃお』世代のおしゃれ観—マンガ雑誌による若者世代の行動規範の形成—」であった。ローティーン的女性（「少女」）を主たる読者層とするマンガ雑誌『ちゃお』について、他国の少女向け雑誌との国際比較も織りまぜながら、その「おしゃれ」に関する記事の内容や影響を解析していく。その上で、今や小学生世代の女性にも化粧をはじめとする「おしゃれ」文化が広く浸透している現状や、当の若年女性に対する「おしゃれ」意識調査などを引証しつつ、日本社会において『ちゃお』等の少女向け娯楽雑誌が積極的に受容され、少女たちのあいだに「主体的におしゃれをしよう」という意識が芽生えつつある、との見解が示された。フロアからは、「女の子はおしゃれすべき」というジェンダー規範を内面化した上で、あたかも自主的にそれを追求しているように錯覚させられる「フーコー的な主体化」である可能性に警戒すべきではないか、などの指摘がなされた。

## 【自由論題F】 地域と個人にみる受容／抵抗／交流

### 桐谷多恵子（司会）、シュディプト・ダス、閻秋君、大和裕美子、斉藤理

第一報告者であるシュディプト・ダス（ピッツョ・パロティ大学助教授／日本学術振興会 PD 特別研究員、東京外国語大学）は、「A.M. ナイル：インド独立運動史における草分け的存在」という題で報告を行った。本報告は明治時代

（1905-1990）に生まれ、日本に亡命、インド料理を日本に普及し、インド独立運動に力を注いだ独立史における草分け的存在として外すことができぬ一人である、A. M. ナイルを取り上げた。インド独立運動の先駆者であるラース・ビハーリー・ボースやネタジ・スバス・チャンドラ・ボースのことはよく知られている。しかし、インドでも日本でも、彼に関する研究はあまり進んでいないのが現実である。そこで、本報告では、A. M. ナイルの日本でのインド独立活動について触れることを目的とした報告であった。ケララ出身のA. M. ナイルはインド独立運動に多大な貢献した偉大なナショナリストの一人である。彼は1928年来日し、ラース・ビハーリー・ボースと出会い、日本での反植民地活動を開始した。その後、ネタジ・スバス・チャンドラ・ボースとも出会い、独立活動はより活発になった。さらに、日本ではラダビノード・パール判事の通訳や翻訳を務めた。A. M. ナイルは1949年、日本の古典劇の舞台として有名な東京・銀座の歌舞伎座近くにインドカレー専門店「ナイルレストラン」を創業し、印日民間交流史においても名を残すべき人物である。報告ではインド・日本においても十分に浸透していないナイルの活動の実像について様々な資料に基づく紹介と考察が示された。

第二報告者の閻秋君（仙台高等専門学校特命助教）は、「鉄道反対論から見る地域社会の伝統文化」という題で報告した。19世紀半ば、産業革命で本格的に登場した鉄道は、交通に変革をもたらしただけでなく、新たな空間関係を創り出したため、経済・政治・文化・生活など多様な分野の近代化に大きな役割を果たしたと言える。しかし、鉄道建設は為政者側からの導入の意向が強いものであり、建設時には、地域住民の拒絶を受けながら彼らの生活に浸透していった面も否めない。従来の研究は、鉄道事業の成果ばかりに注目する傾向が強い。他方で「鉄道忌避伝説」の事例として先行研究でも分析の対象となった。本発表では、石巻を取り上げ、その地理的位置を踏まえつつ、港町を中心とする水運という石巻の交通特色を確認した。また、同地において水運輸送が重視されており、鉄道敷設の交渉を拒否したという言説を把握した。その上で、石巻における養蚕製糸業や農業構造の状況、また鉄道建設による石巻の交通商業の衰退を少しく分析した。これらの考察により、鉄道の建設に対する石巻住民の反対言論の裏には、生活必要性が存在したのかを明らかにした。

第三報告者の大和裕美子（九州共立大学准教授）は、「1980年代における非核自治体宣言の伝播と高揚」という題で報告した。本発表では、1980年代に日本における非核自治体宣言の高揚について、国際的および国内的事情が日本の非核宣言にどのように影響したかが考察された。国際的事業として、1980年11月にマンチェスターで始まった非核都

市宣言運動が13カ国の1400カ所の地方自治体に広がった。この背景には、欧州の中距離核ミサイル配備問題に対する反核運動があった。日本では、1981年11月に結成された「核兵器完全禁止と軍縮を要請する国民運動推進連絡会議」が契機となって、署名運動や平和行動が続いた。このように1980年における非核自治体宣言は日本に「輸入」される形であったが、被爆国としての経験や護憲運動の影響を受け、「日本版」非核宣言が形作られていったという発表内容であった。

最終報告者の齊藤理（山口県立大学国際文化学部教授）は、「「歩く」ことを契機とした文化交流をめぐる基礎的研究」という題で、「歩く」ことを契機とした文化交流を愉しむ層の増加によって、いかなる文化接触が生じ、歩行空間周辺の文化的な環境形成にどのような影響をもたらすのか、前近代における巡礼から、人を「空間構成者」と定義づける近代の空間認知論までを対比的に俯瞰しつつ明らかにした。

とりわけ、気候変動やコロナ禍を契機として拡大している「15分都市（職住拠点はじめ文化的アクティビティを徒歩15分圏内に集約させる）」に焦点を当て、これが人的交流を劇的に増加させ、オープンスペースにおける芸術活動など文化を核とした活力が飛躍的に増大している点、市民イニシアチブのデモ運動などがその原動力になっている点、反対にこの動向に強く抗議する層も存在し、身近な環境形成と「歩く」ことのあり方が社会的争点になっている点を理論づけた。

最後に、人が自由に「歩く」ことを促す「フットパス」を事例に、欧米とわが国の認識の違いを指摘するとともに、「ウォークブル」の潜在力に触れたR.フロリダの言説も交えながら、歩く空間そのものがひとつの文化触媒として機能する今後の展開可能性について総括した。

# 下多アルバム



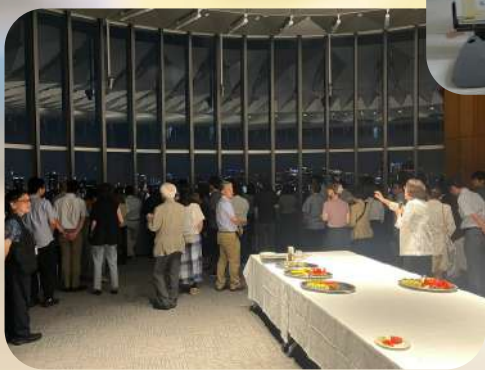
大盛況の開催校企画！



ICCOベストプレゼン  
素晴らしかった！



学生スタッフの皆さん  
ありがとうございました！



実行委員長の平島先生が合図をすると  
It's Magic!懇親会場から東京の夜景が！



理事懇談会。  
川村会長の手に東洋大学のうちわが！

## 大学院生交流会

今大会でも大学院生交流会が開催されました。  
担当の葉柳会員に報告いただきます。

### 葉柳 和則（長崎大学、副会長）

第23回大会の大学院生交流会は、大会初日、昼休みの時間を利用して、東洋大学白山キャンパス6219教室にて開催されました。昨年度までは学会申込フォームではなく、事務局経由で、院生交流会の案内メールを会員に送っていただいていた。この方法だと、リアクションが五月雨式になり、直前申込も少なく、参加者名簿の確定が難しいという問題がありました。この反省をもとに、今年度から学会申込フォームに院生交流会の申込を組み込んでいただきました。そのため学会申込締切後、すみやかに坂口可奈先生から申込者データをいただくことができ、名簿作成作業は格段に容易になりました。

申込者は10名でしたが、体調不良等の理由で、実際の参加者は8名でした。前回の参加者が12名でしたから、やや少なかったです。今回は直前申込や飛び入り参加もあったことを考えると、学会のオンライン申込締切後に一度、事務局からアナウンスしていただく、当日受付で声かけをしていただくといった方法の併用も考えた方がいいかもしれません。ちなみに現在の体制では適正規模は12名から16名程度だと考えています。

前回はお手伝いをお願いしていた先生が、急遽来られなくなったため、私が司会と撮影の両方を担当しましたが、少々無理があり、巡回して下さった事務局の池田悦子さんが撮影して下さった写真に救われました。今回はその反省もあり、撮影を鈴木裕輔先生にご担当いただいたので、私の方は、司会と巡回に専念できました。

最初に参加者の研究の主要テーマと手法を中心に自己紹介していただき、私の方で関連性をもとにグルーピングを提案しました。本来は私が提案するのではなく、院生のみなさんに委ねるのが理想なのですが、時間的制約を考えるとそこまで踏み込めませんでした。

結果として3つのグループが生まれ、「このメンバーで共同研究をするとすれば、どのようなテーマが可能か」という問いについて、単なる仮定ではなく、可能的な未来として議論し、結果をホワイトボードに描き出すという方法でセッションが進行しました。私は各グループを巡回し、議論に

耳を傾け、まれに交通整理しましたが、基本的には院生諸君の意見交換のなかで共同研究の輪郭が作られていきました。

最後に各グループが、ホワイトボードを用いて、簡単なプレゼンテーションを行いました。提案されたテーマは以下の3つです。

- I: 「日本雑誌とコリア・メディアにおけるファッション文化—『ちゃお』、『朝鮮美術』、『愛の不時着』を中心に
- II: 「文化政策とナショナル・アイデンティティ—普遍—個別／文明—文化の相克」
- III: 「日本における仏教語彙の変遷」

プレゼンテーションを聞かせていただいた感触では、対象と方法を絞り込み、必要に応じて新メンバーを加えていけば、いずれも本学会の共通論題や科研のプロジェクトなどに発展しうるテーマでした。大学院生交流会予算はまだ十分に残っていますし、学会全体の研究会費もありますので、院生のみなさんが、この機会を単発で終わらせず、継続的な研究会へとつなげていってくだされば、それに勝る喜びはありません。

最後になりましたが、院生交流会の実施のためにご協力いただいた、池田さん、坂口先生、鈴木先生はじめ関係者のみなさまに心から御礼申し上げます。



今回の交流からどんな企画が生まれるでしょうか？

### 齋川貴嗣（高崎経済大学）

日本国際文化学会第24回全国大会は、2025年7月5日（土）、6日（日）に高崎経済大学で開催する予定です。

高崎経済大学は、高崎市が1957年に設立した公立大学です。経済学部経済学科からスタートし、後に経営学科が設置されました。1996年には日本で最初の地域政策学部を創設し、地域政策研究という新たな領域を開拓しました。以来、北海道から沖縄まで全国から学生が集まる全国型公立大学として認知されています。さらに大学設立60周年を迎えた2017年には、社会・経済のグローバル化に対応する教育を拡充するために、経済学部国際学科が新設されました。このように小規模な地方大学でありながらも、ローカル/ナショナル/グローバルという重層構造の中に位置を占めています。

このたびは北関東地区で初めての大会開催となります。北関東、特に群馬の地は、古来より異なる文化的背景を持つ人々が行き交い、「共に生きるための工夫」を積み重ねてきた場でした。例えば、ユネスコの「世界の記憶」に登録されている「上野三碑」は、古代東アジアにおける文化交流の存在を今に伝えています。また、世界文化遺産の富岡製糸場は、近代日本と西洋との技術交流を物語る遺構です。さらに現代では、外国人人口が20%を超える大泉町、ロヒンギヤの人々が集住する館林市のほか、県内に10か所近くのモスクが存在しています。まさに群馬は、国際交流と多文化共生の長い歴史経験を持ち、現在もその最先端にあると言えるでしょう。

次回全国大会  
2025年7月5日、6日

共通論題・自由論題の応募をお待ちしております。  
応募先／問い合わせ先：第24回全国大会実行委員会  
jsics2025@gmail.com

【共通論題】締切：2024年11月30日（土）必着  
【自由論題】締切：2025年2月28日（金）必着  
前年度より締切が早まりましたのでご注意ください。



他方で、移民・難民など異質な他者に対する差別や暴力を煽る動きが近年世界各地に広がっており、こうした動向に群馬も無縁ではありません。戦時動員により群馬県内で犠牲になった朝鮮人を追悼する施設に対して一部保守系団体が攻撃を繰り返し、最終的に群馬県が追悼碑を撤去したことは記憶に新しいところです。このように地域社会で実践されてきた多文化共生の努力に対するバックラッシュが、群馬においても起こっています。

私たちの「共に生きるため」の営為が問われている現在、次回大会が国際文化学会の意義について再考する機会になることを願っています。



撤去された群馬の森の朝鮮人追悼碑（上）  
「記憶 反省 そして友好」と刻まれています（下）

## 私の研究歴

本号では深松亮太会員にご寄稿いただきました。  
今なお変化の途上にある研究の軌跡をご紹介します。

研究の方向性をシフトしようとしているタイミングで、このような機会を頂き感謝しています。私はこれまでアメリカ南部の人種関係、とりわけアフリカ系アメリカ人に対する差別意識がいかに形成されてきたのかを研究してきました。現在では研究対象を拡大し、「変革に対する不安」が、どのように社会的に扇動されてきたのかを総合的に探究することを目指しています。私が学問に興味を持ち始めたきっかけは、漠然とした「憧れ」が背景にありました。私の姉が高校生の頃（当時私は小学生高学年）、毎年のように交換留学生のホスト・ファミリーになっていたこともあり、それらの経験が漠然とアメリカへの「憧れ」を形成していきました。このような環境のなかで私は、学生時代に何度も挫折を経験しましたが、今現在の私の職業に直結するきっかけとなったのは、映画Amistadです。この映画を見たことで黒人史に興味を持ち、いくつかの入門書を読むようになったのが高校2年生（19歳）の頃です。黒人史を専門的に学びたいと思った私は、AO入試を利用して大学に進学し（2002年）、3人の恩師（学部・修士・博士）に恵まれて、紆余曲折を経て2018年に博士の学位を取得しました。

博士論文にまでつながる研究テーマに興味を持ったのは、大学2年生の時に受けた恩師の授業「アメリカ民族論」のレジュメに掲載されていた1枚の風刺画が大きなきっかけとなりました。（図）



先述のように私は「黒人史」に関心を持って入学したのですが、結果として選択した研究テーマは、「白人による黒人に対する蔑視感情の形成」、つまりは「白人の思想の探求」へとシフトしていました。そして、今現在の私の関心もこのテーマと対をなしていると言えます。今年の全国大会では、はじめて本格的に女性史に取り組みましたが、そこでは「女性参政権」の獲得に反対す

## 深松亮太

（常磐大学人間科学部  
コミュニケーション学科准教授）



る人々の言説に注目しました。つまり冒頭で書いたように、現在の関心は様々な社会改革を食い止めようとする力学に注目し、そのなかで形成された批判言説の共時性と通時性を明らかにすることを大きな目標としています。そこには、私の著書のタイトルにもある「社会不安」が共通するキーワードになると考えています。また、教育活動を研究へと昇華させることにも、ここ2年ほどで興味が広がっています。もちろん、そのきっかけとなったのはICCOのセミナー講師を務めさせていただいている経験があります。「多様性」や「包括性」といった、言葉のみが先行している日本の現状を未来の主役である学生たちの力で変えていくといった壮大な目標を掲げて、授業やゼミを通じて、知識と実践を兼ね備えた学生を輩出していくことを目指しています。掲載させていただいている写真と一緒に写っているゼミ生たちの有志と、手探りでこの企画を進めているところです。将来的には、年度を超えて授業とゼミでの学びを「継承」していく仕組みを構築して、「多様性のありかた」について様々な年齢の人びとと「ディスカッションを通じて共に学ぶ」、そのためのトレーナーを育てていこうと考えています。日本国際文化学会の自由で柔軟性のある研究者の皆様から、研究の岐路に立つ私に多くの叱咤激励を頂戴できますことを願っております。今後ともどうぞ、よろしく願い申し上げます。

## 菅野 敦志（共立女子大学）

2024年8月25日から8月31日にかけての1週間、ICCO（文化交流創成コーディネーター資格）短期集中セミナーが京都・龍谷大学深草校舎にて開催されました。大型の台風10号が本州に上陸するという予報のなか、31名の参加者が集まってスタートしました。

初日は龍谷大学和顔館で集合し、オリエンテーションを開催しました。松居竜五ICCO資格事務局長の説明の後、加藤恵美常任理事から基調講演がありました。在日コリアン研究のフィールドワーク（FW）の経験を通じて、短期集中セミナーの3日間の日程でも踏まえるべき重要なポイントが明示的に提起され、非常に示唆に富む内容でした。主催側学会員7名（松居事務局長、加藤常任理事、倉真一副会長・ICCO参加認定委員長、藤田賀久ICCO資格審査委員、深松亮太会員、池田悦子学会事務局、筆者）からのアドバイスが伝えられた後は、参加者が自己紹介を兼ねた企画書の説明を行いながら、学生同士で質問もし合いました。終了後は和顔館1階の懇親会場に移動し、ケータリングの食事を楽しみながら談笑しました。急な豪雨もありましたが、台風が少しでもそれてくれるように皆で祈りながら過ごした初日の夜でした。

2日目は、午前中にグループ分けが発表されました。基礎調査やテーマのすり合わせを行った後、午後から各グループとテーマ設定に対する面談を、藤田賀久委員を除く上記教員および高橋梓常任理事、湯浅章子ICCO参加認定委員の計8名で実施しました。

3日目から5日目にかけて、学生たちは熱心にFWに取り組みました。4日目には川村陶子会長をお迎えし、夜にホテルレストランで歓談を楽しみました。この間、台風は奄美～九州にかけてノロノロ北上していました。

5日目は、九州に上陸した台風の影響により帰路の交通手段が制限を受けるため、早めに戻ることを決めた約1/3の学生がホテルをチェックアウトしましたが、東海道新幹線が運転見合わせになり、結局ホテルに舞い戻ることになりました。6日目は、別の交通手段で戻れる人以外は、最後の調査やまとめに作業に入ったりしながら、帰路についていた学生たちとオンラインでの共同作業を続けました。

最終日には、龍谷大学和顔館にてオンライン併用で最終発表会が開催され、オンラインで岡田建志審査委員長、飯笹佐代子委員、藤田賀久委員、渡辺愛子委員、事後で平島（奥村）みさ委員といった先生方が審査を担当してくださりました。

今回の短期集中セミナーは台風の影響を受け、全員対面で発表会とはなりませんでしたが、オンラインも併用して予想以上の成果をあげることができました。また、こうした困難を乗り越えることで、グループ内・仲間同士の連帯感も強まったように見えました。連日学生たちを激励し続けてくださった深松会員や、自然災害相手の予測困難な事態に直面したなかでも円滑な運営を進めてくださった松居事務局長と池田さんに改めてお礼申し上げます。



2日目午後には各グループとテーマ設定に対する面談を行う

龍谷大学での発表会後の記念写真  
オンライン発表者、学会関係者で現地に集うことができなかった方々はスクリーンに投影

## 事務局からのお知らせ

### 学会誌『インターカルチュラル』著書紹介・博士論文紹介記事募集（締切：11月7日）

『インターカルチュラル』23号掲載の著書紹介、博士論文紹介記事を募集しております。詳細は学会ウェブページにてご確認ください。

応募先/問合せ先：年報編集委員会 editorialboard.intercultural@gmail.com

### 2025年度全国大会開催のご案内

2025年度全国大会の開催予定日は以下のとおりです。

日時：2025年7月5日（土）・6（日）

会場：高崎経済大学（群馬県高崎市上並榎町1300番地）

今回より共通論題・自由論題の応募締め切りが早まります。共通論題は2024年11月30日（土）、自由論題は2025年2月28日（金）です。応募にあたっては、ウェブページから「2025年度全国大会発表募集要項」を熟読のうえご応募ください。

応募先/問合せ先：第24回全国大会実行委員会 jsics2025@gmail.com

### 2024年度関連学部・大学院情報交換会について

本年度の事業計画記載の「大学間情報交換会」（オンライン）実施については、2025年3月に実施できるよう計画しております。詳細が決まりましたらご案内いたします。

### 今後のICCOについて

2025年度からのICCO新規参加校等の申請期限は2025年度1月31日（金）必着です。次年度の短期集中セミナー開催地は関東で検討しておりましたが、京都で開催予定となりました。

### 会費納入のお願い

2024年度の年会費を未納の会員は年会費のご納入をお願いいたします。納入状況がご不明の場合は学会事務局へお問い合わせください。

一般会員：10,000円、大学院生：5,000円、学部生：2,000円

◆ゆうちょ銀行からお振込みのとき

◆記号番号 00920-8-325835 日本国際文化学会（ニホンコクサイブンカガクカイ）

◆ゆうちょ銀行以外等からお振込みのとき

◆ゆうちょ銀行 店名〇九九 店番099 当座預金 口座番号0325835

問合せ先：日本国際文化学会事務局 jsics@world.ryukoku.ac.jp

#### 【編集後記】

東洋大学での全国大会は大盛況！大会実行委員会の先生方に感謝です。編集者・高橋は夏に地元・青森県弘前市に帰省し、いろいろ悪だくみ。11月に弘前市で文化教育プロジェクトのイベントを開催しますので、詳細はMLでの告知をチェックの上、ぜひ東北旅行をご検討ください！（近畿大学：高橋梓）



東洋大学の手拭いを首に巻き  
自由論題や共通論題に登壇しました！